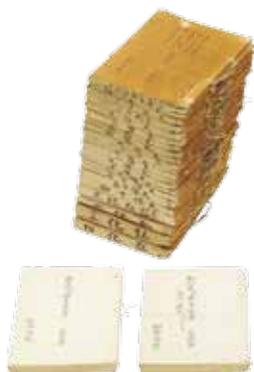


れきし 散歩

第26回企画展 「亀山藩政と武士の日常 ～加藤秀繁日記から～」 石川家家臣加藤秀繁が遺した33年間の日記

亀山藩の日常を伝える加藤秀繁日記

今回ご紹介するのは、亀山城主石川家の家臣加藤秀繁が文化11(1814)年から嘉永2(1849)年までの内に記した、33年間にも及ぶ日記です。加藤秀繁という武士も、彼が書き残した日記も、知る人ぞ知るといっただけで、まだ全国的には知られていません。しかし、歴史博物館では開館以来、20年以上も古文書講座のなかで1巻から読み続けているものです。また、たびたび日記そのものも展示しています。



秀繁日記の外観

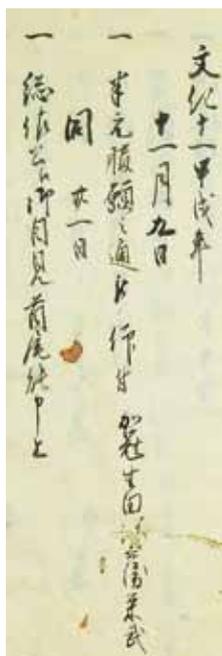
4月から始まる企画展「亀山藩政と武士の日常 ～加藤秀繁日記から～」では、加藤秀繁が記した日記の存在や、その内容から、亀山藩の政治や石川家家臣の日常とは、実際にはどのようなものだったのかをうかがえます。その一部をご紹介します。

加藤秀繁とは

日記の記録者である加藤秀繁は、享和2(1802)年に亀山城西之丸で生まれています。秀繁の加藤家は、家老加藤家の分家です。近年、復原整備された市指定歴史的風致形成建造物「亀山藩主石川家家老加藤家主屋」(西丸町)は、本家である家老加藤家の屋敷です。その近くに分家加藤家もありました。

秀繁の前代の世代をみると、伯父光大は、本家加藤家に養子に入り、秀繁の長男秀升も本家へ養子に入っています。秀升は、加藤内膳光施(後に伴彦)と改名し、江戸時代最後の家老となっています。

秀繁は、明治元(1868)年、次男の秀発(後に亀山銀行頭取)に家督を譲って隠居し、明治6(1873)年72歳で死去しています。



秀繁日記の
最初の記事
「半元服」

日記は、秀繁が12歳から47歳までの自身の家督相続や改名、婚姻、日々の勤めのほか、家臣内での人事異動、大名通行の儀礼や石川家の参勤交替など、亀山藩の政治や日常の出来事を知る上でとても興味深い内容となっています。また、江戸幕府や藩内からの通達や城主による「被仰出」(家臣への訓示)なども記されており、亀山藩を通じた江戸時代の様子を知ることができます。

御礼と恐悦

さて、そのような彼らの日常において、正月はいつから勤めたのでしょうか。実は、元旦から家臣は亀山城に登城し、「年頭御礼」をしています。殿の在城中には、殿から祝儀を下されたりもしています。また、殿の行動や好意に対し、「御礼」だけでなく、「恐悦」(謹んで喜ぶこと)も月に幾度も行っています。

例えば、参勤交替で殿が江戸屋敷に無事到着したことや、江戸城登城が首尾よく済んだことが亀山に知らされると、「恐悦御帳」(喜びを表すための記帳とみられる)がなされます。このように家臣の日常には、当然のことながら「殿の為」の行動が、決まったかたちで行われていたことを知ることができます。

大塩平八郎の乱と家臣の吟味

日常のなかでは、時に江戸幕府からの通達や知らせが入ってきます。特に大きな歴史的事件である天保8(1837)年の大塩平八郎の乱のときには、吟味要請が幕府から通達され、家臣の中に、大塩平八郎や仲間が紛れていないかを調べています。



大塩平八郎手配記事

おわりに

加藤秀繁日記の魅力はいかがでしたか。この続きはぜひ第26回企画展でお楽しみください。

皆様のご来館をお待ちしています。